

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381203

研究課題名(和文)音楽文化のグローバル化と音楽教育を通じた国民アイデンティティーの形成

研究課題名(英文)The Globalization of Musical Culture and the Formation of National Identity through Music Education

研究代表者

石井 由理 (Ishii, Yuri)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：70304467

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、アジアの多民族社会における文化のグローバル化とナショナル・アイデンティティーの関係を、シンガポールと台湾の政策と音楽文化の検証を通して明らかにした。台湾では国民党政府による大陸の音楽文化普及や愛国歌曲は根付かず、民衆は独自に台湾アイデンティティーを築いていること、シンガポールでは国家のNational Day songsなどによるアイデンティティー教育は成功しているかに見えるが、音楽自体が西洋的なうえ、経済発展優先政策のために、独自文化の創造よりは西洋発の音楽文化を志向するコスモポリタンへとなりつつあることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate the relationship between cultural globalization and national identity in two multicultural Asian societies. For this purpose, the study focused on the cases of Singapore and Taiwan and conducted a literature-based research and a questionnaire-based research. The study concludes that despite the Chinese Nationalist Party government's efforts to develop national identity as the people of the Republic of China, the Taiwanese people have developed an alternative Taiwanese identity in music. The study also concludes that Singaporean government's policy to develop national identity seems to be successful, but since the nationally promoted music is based on Western musical culture and the government's pragmatism prioritizes the economic development by attracting Western musical industry, Singaporean youth seems to be developing the identity of cosmopolitan rather than specifically Singaporean.

研究分野：比較教育学

キーワード：文化のグローバル化 音楽教育 ナショナル・アイデンティティー シンガポール 台湾

1. 研究開始当初の背景

近年の日本の教育政策の中ではグローバル化への対応と伝統文化の継承が強調されている。これは日本以外の国の教育政策でも見られることであるが、文化のグローバル化とはどのような現象なのかを実証的に明らかにした研究や、グローバル化によるローカル文化への影響が注目されるはるか以前から、当時の世界基準たる西洋文化を取り入れ吸収してきたアジアにおける状況を、内側の視点から扱った研究は少なかった。

グローバル化によって外から文化が流入する際には取り入れる文化の選択が行われること、国家の役割が衰退しているという主張もある一方で、国家政策として国民アイデンティティを強調する傾向も様々な国において見られることも明らかである。そこで、近代化の始まりと同時に学校教育を通して政府が積極的に介入し、西洋音楽文化を取り入れることによって近代日本の音楽文化を形成しようとした日本を軸として、日本とは異なる過程を経た他のアジア諸国と比較をすることによって、文化のグローバル化と国家および国民アイデンティティとの関連、国家の選択の違いによって起きる多様な文化混合の在り方を示すことができるのではないかと考えた。

アジアの国のうち、日本およびタイの事例はすでに研究しており、本研究では、これら2国とは対照的な多文化多民族社会であり、新しい国家として自らの音楽的アイデンティティを模索中であるシンガポールと、近代国家としては戦前は日本、戦後は中華民国としての国民アイデンティティ教育を受け、1990年代から国民アイデンティティ教育の模索をしてきた台湾を事例として、音楽文化のグローバル化と国の音楽アイデンティティの在り方に焦点を当てた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、音楽文化のグローバル化の中であって、個々の国々がどのように世界共通の文化と独自の文化の両立をはかろうとしているか、その中でどのような自国のアイデンティティを作り出そうとしているかを、アジアの学校教育の視点から明らかにしようというものである。そのために、最終的には日本との比較を念頭に置きつつ、建国の時点ですでに多様な文化が混合しており、以来自国の文化的アイデンティティの模索を続けているシンガポールと、国家としての位置付けがあいまいでありながら、大陸とは異なる独自の文化的アイデンティティを模索する台湾を事例として取り上げ、これらの社会における学校音楽教育政策を通じた音楽アイデンティティ形成の試みと、その受容者である若者がもつ実際の音楽アイデンティティを、実証的に明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

研究は、文献による調査と現地フィールドワークによって進めた。文献調査に関しては、台湾とシンガポールにおける教育・文化政策の過去から現在に至るまでとその歴史的社会的背景を、書籍や雑誌論文、博士論文等の先行研究に基づいて探求したほか、それぞれの政府の出した小・中学校の音楽の教育課程の分析、さらに教科書の掲載内容の分析を行い、政府側が国民に求めてきた音楽的アイデンティティとはどのようなものかを明らかにした。

現地フィールドワークはアンケート調査を主としたものである。対象はシンガポールと台湾の教員養成大学学生、シンガポールと台湾の現職教員のほか、台湾に関してはアンケートに回答した大学生の保護者の一部である。このアンケート調査は、「シンガポール/台湾の音楽」「我が国の音楽」「郷土の音楽」「好きな音楽・よく聞く音楽」について、思いつく曲名を10曲まで自由に回答するもので、回答者に関する年齢等の基本的な情報のほか、自己申告で自らの回答が他者と異なる可能性のありそうな場合にその理由を記入してもらった。また、シンガポールにおいてはアンケート回答者が少なかったため、教員養成大学の音楽教育関係者、中学校教員(2名は音楽担当教員)、小学校教員へのインタビューも実施して、情報不足を補った。台湾のアンケート調査分析に関しては、博士課程在籍中および修了の2名の台湾人研究者の協力を得た。

以上のアンケート調査の結果を、文献およびインタビュー調査から得た知見をもとに分析し、シンガポール、台湾両社会の音楽文化におけるアイデンティティの実態を明らかにした。

4. 研究成果

台湾の文化政策および音楽教育に関する調査から明らかになったのは、日本、中華民国の両国民教育を受けたのちに、1990年代の教育の台湾化による台湾アイデンティティの確認を経て、現在は、過去志向ではなくこれからどのような台湾文化を作っていくかという未来志向のアイデンティティの模索を行っているということである。

台湾は戦前50年間にわたり日本の統治下にあったが、この時期はアジアにおける西洋化による近代化の時期と重なっている。また、日本の音楽教育の近代化に貢献した伊澤修二が台湾総督府にいたこともあり、台湾の音楽文化の近代化は日本と同様のプロセスを経て進められ、日本経由の西洋音楽文化を取り入れていった。学校教育の場では日本の音楽教育で用いられた唱歌や、現地の風物祭事などを歌った台湾版の唱歌などが教科書に掲載されていた。その一方で、日本もしくは日本の影響下で西洋音楽を学んだ台湾出身の作曲家たちが、大衆音楽の分野で活躍し、

西洋音楽文化の影響を受けた近代的な台湾歌謡を形成していった。中でも「望春風」「雨夜花」などで知られる鄧雨賢が著名である。これらは台湾を代表する歌曲であり、戦後、台湾の代表的な歌手である鄧麗君などによって歌われている。

第二次世界大戦後、台湾は日本から中華民国へと返還され、1949年に国民党が大陸での共産党との政治闘争に敗れて台湾に逃れてからは、台湾を拠点として大陸を取り戻すために、台湾住民の中華民国国民としてのアイデンティティー形成の教育が徹底される。このような教育は、1987年の政治戒厳解除と1990年代の内省人の国民党総統李登輝の教育の「台湾化」によって転換し、台湾は初めて台湾独自のアイデンティティーの模索を始めることとなる。この中で、台湾内部の多民族・多文化が注目され、音楽教育においても、少数民族の音楽も含んだ台湾の音楽が多く扱われるようになった。

2000年代の民進党政権は台湾の主体性をいっそう明確にした。また、この頃から英語を小学校に導入するなど、グローバル化対応も意識され始めている。2008年から政権は外省人である馬英九総統率いる国民党政権となり、「台湾化」や「本土」の表現は影を潜めたが、グローバル化の観点から、従来の台湾内の多民族のみならず海外から新たに流入した住民をも含めた多文化・多民族の共生が注目されるようになってきている。また、2000年代に入って音楽が「芸術と人文」の中の一分野となってからは、生活の中にある音楽文化が強調され、過去の文化を継承しつつも自らも未来に伝える文化を形成する参加者として学習者をとらえていることがうかがえる。これらはいずれも、UNESCOなどの唱える文化のグローバル化時代における文化的多様性の維持およびそれに基づくグローバル社会への貢献という考え方と共通するものである。

このような戦後の文化・教育政策の変容は、台湾の小・中学校の音楽教科書分析に顕著に現われている。1987年に政治戒厳が解除されるまでの間は政府機関である国立編訳館が唯一の教科書発行機関であり、掲載されている曲も中国大陸の曲を主とした編輯となっている。また、各教科書冒頭には常に国歌、国旗歌を含む数曲の愛国歌曲が掲載され、共同歌曲とされていた。一方、日本統治時代の教科書の掲載曲や日本の曲は皆無であり、前述の「望春風」のような台湾の言語の歌詞をもつ曲も含まれていない。台湾の音楽は、中国語の歌詞がついた民謡や芸術曲が掲載されているにとどまっている。

これに対して教科書自由化後は一転して、台湾の曲と西洋古典音楽が圧倒的に多くなり、中国大陸の音楽は顕著に減少した。政策では過度の西洋化を懸念して、半数以上は「中国」の曲を採用することとなっているが、実際に選ばれた「中国」の曲はほとんどが台

湾の曲であり、その中には、現代の作曲家による芸術音楽や童謡、台湾の多様な民族の民謡などが含まれる。歌詞は中国語が主であるが、福佬語、客家語をはじめとする台湾の様々な言語のものも含まれる。それまで共同歌曲として最重要と見なされていた愛国歌曲は「国歌」を除いてほぼ姿を消し、外国曲の中に「さくらさくら」やアニメ映画のテーマ曲等の日本の曲が登場するようになってきている。

このように、台湾における国民アイデンティティー教育は、日本および中華民国国民としての教育の後、1990年代に台湾自信のアイデンティティーの回復と確認を行い、現在はその基盤の上にグローバル化の中の台湾独自文化の継承と未来に向けての発展を目指したものとなっている。音楽教育もこの変遷を反映して、教科書の掲載内容や構成が変化してきている。

本研究では、このような教育を受けてきた結果として、現在の台湾の人々がどのような音楽を自らの音楽として認識しているのかを明らかにするために、平成25年に台北と地方都市の教員養成大学それぞれ1校において、自らを台湾人と認識する大学生173名を対象とした質問紙調査を実施した。また、当初は予定していなかった大学生の親と台湾の学校教員に対する質問紙調査も実施した。少ない回答数ではあるが、政治戒厳時代の国定教科書の教育を受けた世代との比較を行う上で貴重なデータを得ることができた。

回答の分類は、回答者自身がどのようにその曲を認識しているかを尊重するため、厳密な音楽的要素による分類ではなく、回答者自身の分類を基本として、筆者および台湾人アシスタントがその分類の確認をした。その結果、愛国歌曲、自然民謡、創作民謡、校園民歌、流行曲、元外国音楽だが台湾の曲として認識されているもの、西洋音楽、中国大陸の音楽、日本の音楽、キャンペーンソング等、中華民国の音楽に分類した。愛国歌曲には国歌、国旗歌の他、国定教科書に掲載されていた共同歌曲、軍歌を含む。また、台湾ではいわゆる民謡は少なく、20世紀に入ってから作曲者がわかっている大衆歌曲も民謡と捉えられる傾向があるため、前者を自然民謡、後者を創作民謡とした。よって創作民謡は古い流行歌であるともいえる。校園民歌は1970年代にキャンパスを中心にはやった中国語の大衆音楽である。中華民国の音楽には、政府による愛国歌曲以外の民間ではやった愛国歌曲を分類した。

「台湾の音楽」に対する大学生の回答として最も多かったのは台湾語の流行歌で、6割を占める。次いで中国語流行歌が15%、台湾創作民謡が12%であるが、創作民謡は古い台湾語流行歌だともいえるため、台湾流行歌と合わせれば7割を超えることになる。愛国歌曲は6曲と少なかった。「我が国の音楽」に対する回答は、中国語台湾流行歌が半数以上

を占め、次いで台湾語流行歌が 15%である。国歌を含む愛国歌曲は 8%を占めるにすぎない。「郷土の音楽」に対しては、台湾語台湾流行歌が 3分の1強、台湾語創作民謡が約 4分の1であるが、愛国歌曲の回答は皆無であった。さらに、上位に入った曲の特徴を分析すると、3つの項目のいずれにおいても台湾語創作民謡もしくは流行歌である「望春風」「雨夜花」「家後」が不動の回答曲であり、「我が国の音楽」ではこれに加えて第1位に2位以下を大きく引き離して「国歌」が入り、「郷土の音楽」では自然民謡である「丟丟銅仔」が第3位に加わることになる。これら3ないし4曲と次の曲とでは回答数において大きな差がある。一方、「好きな音楽・よく聞く音楽」に対しては特に回答が集中する曲はなく、半数以上が中国語台湾流行歌、約 20%が西洋流行歌、韓国流行歌と日本流行歌がそれぞれ約 10%であった。

保護者からは 16 回答が得られた。上位に入ったのは、「台湾の音楽」では、「望春風」「雨夜花」「高山青」(映画テーマ曲。もとは中国語歌詞。)
「丟丟銅仔」のいずれも台湾語の曲、「我が国の音楽」では「茉莉花」(古く大陸から伝わる民謡)、「中華民国頌」(民間愛国歌曲)、「龍的傳人」(校園民歌)、「康定情歌」(四川省民謡)、「梅花」(台湾流行歌)のいずれも中国語の曲、「郷土の音楽」では「丟丟銅仔」「焼肉粽」「天黒黒」「西北雨」のいずれも台湾語の曲であった。

以上の結果からわかるのは、戦後国民党政府が行った中国大陸の音楽文化の教育は、人々の間にはほとんど根付いていないということである。特にそのような教育を直接受けたはずの親世代の回答に「国歌」が全くなく、代わりに自然民謡や民間愛国歌曲が回答されたことは興味深い。一方、1990年代以降に学校教育を受けた大学生世代は、「我が国の音楽」の第一位として「国歌」を回答しており、国民党によって持ち込まれた「国歌」への抵抗感は、既に中国語が母語となった大学生にはなくなっているようである。「台湾の音楽」としては世代を越えて鄧雨賢の「望春風」「雨夜花」が共有されているほか、親世代が答えた古い流行歌「高山青」が学生回答では新しい流行歌「家後」に入れ替わったが、台湾語歌曲であることに変わりはなく、自らの母語が中国語になっても台湾アイデンティティーと台湾語は切り離すことができないことがわかる。同様に、「我が国の音楽」に対する中国語曲の回答に現われたように、国の音楽は世代を越えて中国語曲となる。

「郷土の音楽」は「丟丟銅仔」が両世代共通に挙げられているほか、異なる曲目ではあるがいずれも台湾語の創作民謡とやや古い時代の流行歌を郷土の音楽と見なす傾向がみられた。

先述の教育政策の分析では、1990年代に大陸とは異なる台湾の民族的文化的多様性が強調されるようになり、2000年代にはグロー

バル化の文脈の中でその多様性の尊重が唱えられていた。しかし、質問紙調査の結果からは、そのような多様性を尊重しようという傾向は見られない。回答者の中に少数民族の学生がほとんどいないということも理由としては考えられるが、後に述べるシンガポールでの調査結果と比較すると、それだけが原因ではないことは明らかである。教科書が強調する多文化社会台湾とはうらはらに、人々の中では、戦前の台湾のマジョリティー言語であった台湾語の歌に台湾のアイデンティティーを求める結果となっており、そのような曲の代表として「望春風」が支持を集める一方で、各民族の共通言語である中国語の曲にはまだそれほど回答の集中する代表曲は生まれていない。また、大学生が生活の中で実際に聴く音楽は西洋ポップスおよびその影響を受けた日本、韓国、台湾のポップスである。音楽教育では生活の中にある台湾の伝統的音楽文化の継承を強調しているが、現実には西洋的大衆音楽が若者音楽文化を席卷していることがわかる。また、筆者が行った日本での調査結果と比較すると、日本の大学生がほとんど日本のポップスしか聞かないのに対して、台湾の大学生は台湾以外の国のポップスを聞く比率が高いことも分かった。

次に、シンガポールについての文献調査からは、建国以来一貫して経済的発展と多民族主義を中心に据えたプラグマティックな国民アイデンティティー形成の教育を行ってきたが、経済の発展に応じて、伝統的アジアの価値を共有する国民、アジア的近代化を遂げた New Asian、グローバル化に応じたコスモポリタンというように国民像が変化し、現在の文化政策は、経済発展のために海外からの観光客や芸術家を引きつける場の提供であり、音楽教育はその担い手の育成が期待されていることが明らかとなった。

シンガポールは 1965年にマラヤ連邦から追われる形で独立したが、住人は植民地時代に中国、マレー半島、インドから職を求めて移住してきた人々であったため、「国民」なきままに「国家」になったといわれる。よってその政策は初めから「国家」としての存続の危機を前提としており、国の政策上の「国民」アイデンティティーは、経済的発展のプラグマティズムと中国人、マレー人、インド人その他の民族の調和に求められた。学校教育政策においても中国語、マレー語、タミル語のいずれかの民族の言語と共通語としての英語を学ぶバイリンガル教育が行われてきた。

経済発展と多様な民族文化の尊重という政策は音楽教育にも影響を与えている。経済発展を最優先事項としていた 1960年代には、音楽はアウトターサブジェクトとされ、学校のカリキュラムではあまり重視されていなかった。しかし、政策としては、互いの文化的特徴を尊重し、多様な民族コミュニティの子どもたちを束ねる強力な力であると考え

られ、教師たちは中国、マレー、インド、英語の音楽を教えることを奨励されていた。マレー語の国歌である Maja-lah Singapura のほかに異なる音楽文化を代表する歌を教えることが求められたが、実際の教室の中では主として英国の西洋音楽が教えられた。シラバスはなく、教員養成も不十分だったため、教員が自分の好みで歌を選んでいった。

1970年代の教育政策の焦点の一つはバイリンガル教育であり、音楽教育においてもシラバスの目的には、中国語、マレー語、タミル語、英語の歌の中から国語であるマレー語を含む少なくとも2言語の歌を教えるようにと書かれている。また、独立記念日に演奏されるために、英語とマレー語で歌われた Singapore、英語、マレー語、中国語で歌われた The More We Are Together などの National Day songs が作られた。

1980年代になると政府は、経済発展によって国家としての自信をつけた一方で、西洋の退廃的な文化（ヒッピー、ロック音楽など）の影響が若者に見られることを危惧し、アジアの一員としてのシンガポールを強調するようになった。初めは儒教などの伝統的なアジアの価値観を強調したが、やがて西洋個人主義に基づいた近代化とは異なるアジア的近代化を遂げた "New Asia" というアイデンティティーを唱え始める。

音楽のシラバスも改訂され、音楽を理解し楽しむ、自己表現の機会を与えるなどの、個々の児童が音楽そのものをどう学ぶかの視点が入ってきた。国歌、school song、Children's Day song が小学校の全てのレベルで教えられたほか、推奨される歌のリストが掲載され、National songs のほかに中国語、マレー語、タミル語、英語のそれぞれの言語の歌が含まれていた。

1980年代半ばになると、政府は芸術を経済的な成長の可能性のある分野だと認識し始めた。この中にはポピュラー音楽のコンサートや映画制作などが含まれており、かつての西洋文化に対する警戒感が大きく転換している。また1988年には国民アイデンティティーを発達させるために "Sing Singapore" プログラムを開始し、マスメディアや学校教育などを通して、歌の普及活動が行われるようになった。小学校の音楽教育においては1980年代初めに創造性の重視とともに教科としての音楽が重視されるようになり、コダーイの理論に基づく音楽教育が推奨されるようになった。しかし、扱う教材は4言語の文化の尊重と国民形成を反映したものであり、また、実際の教室での改革はあまり進まなかった。

1991年、シンガポール政府は Singapore: The Next Lap というシンガポールをグローバル・シティへと変貌させるための戦略を発表した。これはグローバル化への対応に焦点合わせたものであり、経済発展というプラグマティズムを維持しつつ、国民アイ

デンティティーのよりどころを「近代化されたアジア人」から「グローバル化されたコスモポリタン」へと変化させようというものである。文化のグローバル化現象として、多くの国が世界標準に合わせてユニバーサル化をすると同時に独自文化の強調をするということが指摘されているが、シンガポールも同様であり、1997年には Singapore 21 委員会報告書で、シンガポール人は「根を張っている」感覚とコスモポリタンである感覚を同時に持つことが重要だとしているほか、副首相から National Education の政策が発表され、シンガポール国民意識を高める教育が導入された。

以上の音楽教育の結果としてシンガポール人が音楽においてどのような国民アイデンティティーをもっているのかを明らかにするために、本研究では台湾で実施したものと同じアンケートを平成25年3月にシンガポールの教員養成学部生11名(すべて中国系)と現職教員研修参加者17名(うち3名がマレー系)に対して行った。質問内容は前述の台湾での調査と同様である。

はじめに「シンガポールの音楽」への回答では、シンガポールを代表する大衆音楽作曲家・歌手である Dick Lee の「Fried Rice Paradise」がどちらのグループでも最多の回答を集め、特に現職教員の回答では2位の曲の2倍以上の13回答があった。この曲は、多様な文化の共存による豊かさを象徴する多様なメニューを提供するレストランを歌ったものであるが、National Day のために書かれた曲ではなく、草の根レベルでシンガポールの音楽だと認識されている。この曲を含めた第3位までの曲は両者とも共通していて、同じく Lee の作品でありナショナル・デーのための委嘱作品でもある「Home」と、台湾の校園民歌の影響を受けた新謡(シンガポールの歌を意味する)の曲である「細水長流」が選ばれている。4位以下はほぼ National Day songs や National Education songs で占められるが、回答者に中国系が多いにもかかわらず、マレー語の曲やタミル語の曲(学生回答のみ)も回答されており、多民族主義が浸透していることがうかがえる。ポップスやドラマのテーマなどの回答は学生では3回答のみであったが、現職教員では15曲ほど回答されている。マレー語である「国歌」の回答は学生1名のみであった。

次に「我が国の音楽」に対しては、ほとんどの回答が National Day songs もしくは National Education songs であり、「国歌」は学生では第1位、現職では第3位、「Home」は学生で第2位、現職で第1位の回答数であった。大きな違いは現職の第2位であった「Singapore」と第4位の「Rasa saying eh」が学生の回答には見られなかったことである。1名のマレー人現職教員がこれら以外の曲を回答したほかは、「Fried Rice Paradise」₁、テレビ、ミュージカルの曲が1回答ずつにと

どまった。

「郷土の音楽」への回答では、先述の「Home」が両者で第1位となったほか、上位を National Day Songs と National Education Songs が占めることは共通であったが、学生回答では第2位が「Fried Rice Paradise」であったこと、現職教員のマレー人回答者3名がマレー語の曲を多く回答したことが異なった。

「好きな音楽・よく聞く音楽」への回答は、台湾の場合と同様に西洋ポップスおよびアジアポップスが多いが、学生と現職教員の回答を比較すると、学生の回答に英語の西洋ポップスが多く、シンガポールの若者が英語を第一言語とするコスモポリタンになりつつあり、それによって聞く音楽も西洋化していることが推察できる。

シンガポールの場合、政府が国民アイデンティティーづくりのために展開している National Day songs はかなり受け入れられているといえる。しかし、初期の National Day songs がカナダ人作曲家の作品であったり、その他の曲も西洋ポップス風であるなど、文化的にシンガポール人を構成する多様な民族の音楽文化を継承しているとは言い難い。また、近年の芸術への注目も経済的資源としてのものであり、収益を上げるために欧米のミュージカルや著名な歌手の興行を行うことが中心で、アジアに「根っこ」を持つよりもむしろコスモポリタン育成へと向かっているといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

福田隆真、石井由理、森下徹、王宇鵬、台湾における芸術教育について、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、査読無、第41号、2016、pp.139-144

Ishii Yuri、Globalization Viewed through School Music Education in Japan and England、日英教育誌、査読有、創刊号、2015、pp.31 - 47

石井由理、台湾の大学生にとっての台湾の音楽、山口大学教育学部研究論叢、査読無、第65巻第3部、2015、pp.1 - 9

石井由理、郭淑齡、台湾の音楽教育における自文化認識、山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、査読無、第39号、2015、pp.129-137

郭淑齡、石井由理、台湾の教育政策におけるグローバル化と伝統文化、山口大学教育学部研究論叢、査読無、第64巻第3部、2014、

pp.1 - 13

[学会発表](計4件)

Yuri Ishii “National Identity in Music in Multicultural Societies: A comparison between Taiwan and Singapore” 32st International Society for Music Education World Conference (2016年7月24日 - 29日) Royal Conservatoire of Scotland, Glasgow, UK.

Yuri Ishii “Creating and Maintaining Cultural Traditions through Music: A case of Taiwan” 19th Asian Studies Conference Japan (2015年6月20日 - 21日) 明治学院大学(東京都港区)

Yuri Ishii “Using Cultural Politics to Form National Identity: Political intentions and their outcomes reflected in Taiwanese music education” 12th Cultural Diversity in Music Education Conference (2015年6月10日 - 12日) University of the Arts Helsinki, Sibelius Academy, Helsinki, Finland.

Yuri Ishii “Musical Identity Taught and Perceived: A comparison of Japanese and Taiwanese university students’ perception of their own musical cultures” 31st International Society for Music Education World Conference (2014年7月20日 - 25日) Pontificia Universidade Catolica do Rio Grande do Sul, Porto Alegre, Brazil.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石井 由理 (ISHII, Yuri)
山口大学・教育学部・教授
研究者番号：70304467